総評＆受賞者の声

2020 年 2 月 18 日

第９回学生観光論文コンテスト（賞金総額１００万円）
審査委員長総評と受賞者の声

１．審査委員長総評（石川　尅巳　株式会社ジェイティービー　元常勤監査役）

本コンテストの審査委員を代表して、第９回学生観光論文コンテストの総評を述べさせていただきます。今回、全体で３９大学・１短期大学・３専門学校より合計１２１編の応募があり、一次選考を通過した７編の最終審査をさせていただきました。

いよいよ本年は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、訪日外国人旅行者４,０００万人を目指した様々な取り組みなど、世界が訪れたくなる観光立国ニッポンを真に実現するために邁進しているところであり、学生の皆さんの観光産業への関心も更に高まっているものと思われます。

一方で、現在、新型コロナウィルス感染症の世界的な流行、拡大が我が国の観光産業にも暗い影を落とし予断を許さない状況にきており、一刻も早く終息に向かう事を祈るばかりであります。

さて、今回のコンテストにおいては、７論文が最終審査に進んでおりますが、例年同様に学生らしい生き生きとした論文が目立ち、審査委員一同、順位をつけることに苦労いたしました。そして厳正なる審査の結果、コンテストの最高の賞である最優秀賞１編並びにそれに次ぐ優秀賞２編を選出いたしました。

尚、審査においては、過去のコンテスト審査と同様に、課題の設定、目的の明確さがあり、課題に関する専門書籍・先行論文等を精読したうえで、学生らしい発想をもって、仮説を立て、アンケートや参与観察等の実地調査を行い、その調査データを基に、結論を導き、実現可能な提案で締めくくる論文構成を心がけているかを中心に審査を進めました。

その結果、今回は、最優秀賞（観光庁長官賞）として、香川大学　経済学部３年　大森皓太（おおもり　こうた）代表他２名の方がまとめたテーマ A『自然資源と文化資源を融合させた国立公園の利活用～屋島山上ちょうちんカフェという社会実験を通じて～』、優秀賞（公益財団法人日本ナショナルトラスト会長賞）として、立教大学　観光学部３年　岩坪龍彦(いわつぼ　たつひこ)代表他４名の方がまとめたテーマＢ『アルベルゴ･ディフーゾの実態と日本への応用可能性』、同じく優秀賞（一般社団法人全日本シティホテル連盟会長賞）として、立教大学　観光学部３年　武藤達郎（むとう　たつろう）代表他１名がまとめたテーマＣ『日本におけるＭＩＣＥの高度人材育成～ＭＩＣＥ誘致により宿泊産業を豊かにする～』の３点が選出されました。受賞者の皆さん、本当におめでとうございます。

これからも引き続き学生の皆さんの刻苦勉励を期待します。

最後になりましたが、第９回学生観光論文コンテストを無事に開催することができましたのも国土交通省観光庁をはじめとする各種団体の皆様のご支援とご高配の賜物と深く感謝し厚く御礼申し上げます。

２．受賞者の声

１）**最優秀賞【観光庁長官賞】**：香川大学 経済学部 ３年　大森皓太（おおもり　こうた、代表）・天谷梨夢・西原歩祐翔、テーマＡ**『自然資源と文化資源を融合させた国立公園の利活用～屋島山上ちょうちんカフェという社会実験を通じて～』**

この度は、第９回学生観光論文コンテストにおきまして、最優秀賞である【観光庁長官賞】を賜り、ゼミナール一同大変嬉しく、光栄に思っています。

本論文のテーマである「屋島山上ちょうちんカフェ」は、本大学が香川県高松市から、地域活性化に関する取り組み

の依頼を受けたことから始まりました。活動実施にあたって、特に重視したのは、「屋島の観光振興」と「讃岐提灯の産業振興」という異分野の課題解決を図ることです。また、課題解決に向けて、来訪者の「交流拠点」として「カフェ」を学生が主体となり期間限定で運営することにより、ここにしかない魅力の創造が可能になったと考えています。

私たちは、４年間の実践的活動を通じて、香川の魅力である屋島の夕夜景と、讃岐提灯の魅力発信を行ってきました。外国人旅行者の目が地方に向けられている中、地方固有の自然、文化資源にはまだまだ活かすことのできる魅力が眠っていると思います。今回の私たちの提案が、そうした地方の魅力の利活用に繋がれば幸いです。

最後に、本論文の執筆にあたり、ご指導くださいました西成典久教授、また、ちょうちんカフェを実践するうえで連携させていただいた屋島山上の皆様、ならびに高松市役所の皆様、様々なところでサポートいただいたカフェ協力店やメディアの方々、香川大学関係者の皆様、その他多くの方々に支えていただいたことでこうした実践活動ができたことを心より感謝申し上げます。

２） **優秀賞**【 公益財団法人日本ナショナルトラスト会長賞】 ：立教大学 観光学部 3 年　岩坪龍彦（いわつぼ　たつひこ、代表）・伊藤千夏・久保七海・佐藤菜々美・佐藤真衣、テーマＢ**『アルベルゴ・ディフーゾの実態と日本への応用可能性』**

この度は第 9 回学生観光論文コンテストにおきまして、優秀賞【公益財団法人日本ナショナルトラスト会長賞】を賜りまして、有難うございました。

また、この場をお借りして、論文執筆にあたりご意見、ご協力をいただきました、アルベルゴディフーゾ協会長 Giancarlo Dall'Ara 様、旅館大沼第 5 代目湯守 大沼伸治様、一般社団法人雪国観光圏代表理事兼株式会社いせん代表取締役 井口智裕様、株式会社シャンテ矢掛屋女将 西野様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

私達は、イタリア発祥の宿泊施設の形態であるアルベルゴ・ディフーゾ(以下 AD)が、日本においても着目されつつあると言う現状に対して疑問をもち、AD とはどう言った概念であるのか、日本に持ち込まれていることによる影響はなにか、日本において理論的により良い AD のあり方とはなにかということを調査、考察してまいりました。

一方で、大衆観光に起因する社会問題や環境問題の解決策の一つとして、自然・文化環境の保全を主軸に置いた持続可能な観光開発が求められています。

こうした背景を踏まえ、地域内に機能を分散させた宿泊形態である AD は同時に地域の自然・文化資源と密接に関係しており、そうした資源を守る地域住民全体の活性化および交流による発信に効果的であると考えます。

AD が日本に対してより良い効果を発揮する仕方を考察した結果、ナショナルトラスト活動の理念へと結びつき、受賞という形でご評価いただくことができました。この度のご評価を糧に、今後も一層研究に励みたいと思います。

最後になりましたが、改めましてこのような名誉な賞をいただきまして、ありがとうございました。

３）**優秀賞**【一般社団法人全日本シティホテル連盟 会長賞】：立教大学 観光学部 3 年　武藤達郎（むとう　たつろう、代表）・吉村壮太　テーマＣ**『日本における MICE の高度人材育成～MICE 誘致により宿泊産業を豊かにする～』**

このたびは、優秀賞【一般社団法人全日本シティホテル連盟会長賞】にご選出いただき、誠にありがとうございます。このような栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。

私たちは主に宿泊産業をテーマとして日々研究を重ね、宿泊産業の現状と今後について考えてきました。今回の論文

を執筆するにあたって、就職活動を行う現状を踏まえ、ホテルの経営体制やキャリアパスに興味を持ち、提案を行いたいという思いが芽生えたことがきっかけでした。途中、提案へ向けてインタビューの実施やセミナー参加を重ねていくなかで、初めに想定していた仮説と結論から、大きく方向転換せざるを得ない状況が生まれました。しかしその苦境を逆手にとり、私たちの提案を日本の MICE 産業促進に向けた取り組みへつなげることができました。私たちの論文が、日本におけるさらなる MICE 競争力やホテル経営体制、高等教育機関の充実のきっかけとなれば幸いです。

私たちは今、就職活動の真っ只中にいますが、観光学部で学んだ経験、論文執筆のために学んだことを武器として、社会に貢献できるよう、今後も努力を重ねてまいります。

最後にはなりますが、インタビューをさせていただいた佐古貞義先生、原忠之先生、コンテスト参加の機会をくださった井門隆夫先生、ならびにアンケートに回答いただいた立教大学観光学部の皆さまに心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

３．今年度の応募学校名一覧（順不同）

愛知学院大学・桜美林大学・香川大学・金沢学院大学・金沢星稜大学・九州産業大学・共愛学園前橋国際大学・京都橘大学・慶應義塾大学・神戸学院大学・國學院大學・駒澤大学・作新学院大学・実践女子大学・就実大学・城西大学・成城大学・西南学院大学・専修大学・高崎経済大学・拓殖大学・中央大学・筑波大学・東海大学・同志社大学・東洋大学・獨協大学・長岡技術科学大学・長崎大学・二松學舍大学・日本大学・北海学園大学・明治大学・明星大学・横浜国立大学・立教大学・琉球大学・和歌山大学・早稲田大学・創価女子短期大学・JTB トラベル＆ホテルカレッジ・大原法律公務員専門学校横浜校・神田外語学院

４．過去の応募論文数と学校数

１）第１回	２０１１年度	論文数～３３編	学校数～　９大学・３専門学校
２）第２回	２０１２年度	論文数～６１編	学校数～２８大学・２専門学校
３）第３回	２０１３年度	論文数～６２編	学校数～２７大学・１専門学校
４）第４回	２０１４年度	論文数～４９編	学校数～２７大学
５）第５回	２０１５年度	論文数～４５編	学校数～２５大学・１専門学校
６）第６回	２０１６年度	論文数～５１編	学校数～２５大学・１専門学校
７）第７回	２０１７年度	論文数～７６編	学校数～３３大学・１専門学校
８）第８回	２０１８年度	論文数～９４編	学校数～４１大学・２専門学校
９）第９回	２０１９年度	論文数～１２１編	学校数～３９大学・１短期大学・３専門学校

以　上